「つなぎ」のない微妙なバランス

伊藤　哲

（いとう　さとし、宮崎大学農学部）

ハルニレと格闘する筆者（2008年11月、宮崎市高岡の境川にて）

このシリーズに寄稿するに際して、修士課程を終える頃からずっと迷い続けている問題を突き付けられ、本当に困惑した。今さら急に答が出そうにないので、恥をしのんで自分の迷いを正直に晒すとともに、申し訳程度であるが、学会についても少し意見を述べたい。

私の専門：二重路線

私の専門は造林である。最初は卒業研究の植物社会学から入った。しかし、いわゆる自然植生など周りにほとんど見当たらないことに疑問を持ち、修士では二次萌芽林の生理生態を研究した。実践的研究ではなかったが、本人としては面白い発見が多々あった。同時に、大学院で竹下敬司先生から地位推定の授業を受け、林地のヘテロ性に対する極めて物理学的なアプローチに相当ショックも受けた。これが、自分の志向を「場の科学」としての林学にシフトさせるきっかけだったと思う。ほぼ同時期に東三郎先生の「地表変動論」に出会い、この二つが今も大好きな渓畔林研究へと導いてくれた。場の科学へのシフトには、M先生やN先生のスケール論も大きく影響した。重要な示唆を受けた先生4人とも砂防がご専門なのは何故だろうか。スケール論は学位論文をまとめた時に強く意識したはずだった。それでも、生態学の大先輩から「実験系と野外観察系の“つなぎ”部分が足りない」という指摘を受けた。あれからおよそ20年、課題はまだ克服できていない。

就職して間もなく、技術系職員から「その研究は何に使うの？」と聞かれ，答えに窮した。異動を機にとりあえず人工林に手をつけ、生物多様性に関するあまり使えない論文をいくつか書いた。職を得て20余年、渓畔林を軸にした集水域管理という枠組みで、これまでの研究がやっと一つにつながりかけてきた気がする。思えば悠長かつ恵まれた話であり、これがなかなか許されない今の若手はある意味かわいそうだと思う。

ひと頃は、ピュアな生態学研究は生態学会などの他学会で、「実践っぽい」研究は林学会で発表するように分けた時期もあった。とある過激な研究会に引きずられたのも理由の一つだろう。しかし最近は、元々基礎学問メインであったはずの他学会で管理議論が白熱したりするので、いよいよ自分の立ち位置がわからなくなってきている。自分自身で残念なのは、基礎研究と実践研究を使い分けられても、両者を“つなぐ”仕事がほとんどできていないことである。それでいて、今も二つの二重路線（生理・生態、応用・基礎）を両方捨てきれていない。これは果たしてバランスが取れているのか。

ケーススタディの評価

自戒を込めて「実践っぽい」と書いた。敢えて辛口で付け加えれば、ここ数年で再び増えてきた施業・管理関連の発表は、数理解析手法の新しさを除けば、ネット検索では目立たない昔の研究（たとえば竹下 1964）の焼き直しや、結論が安易で実践に耐えうるのか疑問が残るものも結構あるように感じる。数十年周期で繰り返されるテーマも少なくない。これらの研究に意味がないと言っているわけではない。自己否定はしたくない。時間がかかり、地域性を伴う現象を扱わざるを得ない分野だからこそ、流行で終わらせないために必要な配慮があると思う。ひとつは、過去の貴重な蓄積にもう少し頑張って目を向けること。もう一つは、自分のデータの持つ個別性と普遍性を見極め、ケーススタディの限界を認識することである。さらに学会（誌）としては、この限界を許容して個別ケースの重要性を評価することが、個々の研究をつなぎ生かす上で大事だと考える。そのうち誰かが本格的にメタ解析をやって下さるのを期待している。

造林分野は学会誌掲載論文数でも大会講演数でも大きな比率を占める重たい分野である。一方、森林管理を考えるとき、造林は下請分野の一つであるとも思う。この下請という意味で、造林分野が他の分野（特に計画分野）に貢献できているかというと、これも疑問である。つながらない原因が何なのかも、解決方法もまだ思いつかない。

学会への提案

研究者個人ではなく森林学が社会に貢献していく上で、森林学会という組織の役割は極めて大きい。この役割は、学会の定款にも明記されている。ただし、単に学会が存在するだけでは、組織的な社会貢献もなかなか実践できないであろう。これを改善し、学会と社会をつなぐために、重要な社会的課題に対応した専門委員会の設置を検討してもよいのではないかと考える。

（専門：造林学）